

シヨップでは、熊本大学医学部医学科の教育成果の作成（熊本大学医学部医学科学生が卒業時に獲得しておくべき項目の明文化、熊大が育てたいと願う医師像の明確化）や、学生が教育成果を獲得するための教育方略と、教育成果を獲得したかどうかを評価するための方法についての検討などを行ってきました。その成果として、熊本大学医学部医学科の教育成果の決定、昨年度からスタートした統合卒業試験の導入などがあげられると思います。

本邦の医学教育において、見学型ではなく診療参加型臨床実習の充実の必要性が重要な課題とされています。二〇一五年度は臨床実習の方法や評価方法についてデイスカッションしましたが、二〇一六年度も引き続き診療参加型臨床実習の充実をテーマとしてグループワークや全体討論を行いました。学外講師として二〇一五年度に引き続き東京医科歯科大学教授、高田和生先生をお招きし、診療参加型臨床実習について国内のトップランナーである東京医科歯科大学の現状をご紹介いただき、討論でもご助言をいただきました。まず「診療参加型臨床実習とは」ということについての共通認識と、診療参加型臨床実習終了時の到達点の確認をしていた上で、(1)学生をチーム医療の一員として迎え入れる上で重要となる教育指導体制（いわゆる「屋根瓦式」を含む）についてどうするか

(2)臨床実習の現場での学生評価をどうするか、について討論していただきました。指導体制については指導教官や研修医の役割、患者からの同意書などについて具体的な案を提示いただきました。また学生評価についてはログブックやカルテ記載についての評価、mini-CEXについての原案や運用案なども提示していただきました。これらの成果は今後の臨床実習に直接反映されるものと期待されます。

最後に、本ワークショップの開催に際し、企画、運営にご尽力くださいました安東由喜雄前医学科長、古川昇先生、谷口純一先生、またご多用の中、参加していただきました教職員、学生の皆様に心より感謝申し上げますとともに、御支援をいただきました肥後医育振興会に御礼申し上げます。

熊本地震における被災者・看護職への精神的支援と支援方法に関する研修会報告

熊本大学大学院生命科学研究部

臨床看護学分野教授 宇佐美しおり

平成二十八年四月十四日にM六・五、四月十六日にM七・三の前震と本震が益城町宮園、西原村を震源地として起こった。その後、八月一日では一九四三回、十一月では四二九六回におよび余震が続いた。建物被害状況では全壊が八六九七

件、半壊から一部損壊は一八万九三九件、震災関連死は二二八名、重症から軽症までは二七五三名だった。

筆者は、熊本県看護協会と連携し、災害後、被災者でありながらも支援者として仕事をし続けた看護職を対象に、災害支援として、月に一回九時間（一人につき三時間のグループ参加）、定期的に力動的療法、ESR（出来事インパクト尺度）高値の看護職にセルフケア支援のための個別面談を行った。災害後は、看護職のうつ病・PTSD（心的外傷後ストレス障害）、これらの影響による離職率の増加が世界的にも報告されている。看護職の離職を予防するため、うつ病の前のうつ状態、PTSDになる前のPTSR（心的外傷後ストレス反応）状態悪化予防のため、一回三時間の力動的集団精神療法を、東日本大震災でも実績もたれている小谷英文博士（PAS心理教育研究所理事長、国際基督教大学名誉教授）とともに実施した。さらに、災害後ESRが高値だった看護職に対し、PTSRを予防し仕事が継続できるように生きたエネルギーを高めセルフケア支援のための個別面談を行った。平成二十八年四月から平成二十九年三月までの間に参加した看護職は、合計三三五名だった。支援前後で、災害後の心の状態の変化ならびにESRの変化、プライマリケアPTSD質問紙の改善がみられ、これらの支援による成果と考えられた。物理的復興

がさらにはかられているため、今後は心と身体の問題（慢性疾患の悪化）が生じること世界的に明らかになっている。PTSD・うつ病予防、慢性疾患の悪化防止を目的とした看護職による震災支援を引き続き行うことが必要であると考えられた。

第十七回熊本エイズセミナー 国際シンポジウムの報告

熊本大学エイズ学センター教授

松下 修三

平成二十八年十月三十一日から十一月二日の三日間、くまもと県民交流館パレアにて、第十七回 熊本エイズセミナー 国際シンポジウムを開催いたしました。開催に当たっては、肥後医育振興会からご支援をいただき大変ありがとうございました。心よりお礼申し上げます。本シンポジウムは、平成十二年度から毎年一回、国内外の著名なエイズ研究者の招聘などを計画して開催しており、エイズ研究分野で、定期的に行われている国内唯一の国際シンポジウムとして、高く評価を受けています。今年度は初めての試みとして、第二回IRCMS 国際シンポジウムと合同開催と致しました。総参加者一五二名、エイズ関係九八名の内、三二名が外国人学生・研究者であり、国際色豊かなセミナーとなりました。口演二七題（エイズ関係一三題）およびポスター五